



Data

監督・脚本: アントニオ・ピアッツ
 ア/ファビオ・グラッサドニ
 ア

原作: マルコ・マンカッソーラ『白
 い騎士』

出演: ユリア・イエドリコヴスカ/
 ガエターノ・フェルナンデス
 /コリンヌ・ムサラリ/アン
 ドレア・ファルツォーネ/ヴ
 インチェンツォ・アマート/
 サビーネ・ティモテオ

■ショートコメント■

◆チラシによれば、本作は「2017年カンヌ国際映画祭批評家週間のオープニング作品」に選出され、イタリア・アカデミー賞脚色賞をはじめ、イタリアの主要映画賞を多数受賞。」した作品らしい。また、本作については、さまざまな作家、ライター、映画評論家等の「一言コメント」をまとめたチラシもつくられている。それによると、本作の原作は、イタリアで社会問題にもなったマルコ・マンカッソーラの短編小説「白い騎士」であることがわかるが、もちろん私はそれを全く知らない。

◆本作冒頭、学校帰りの中学生らしき13歳の少女ルナ(ユリア・イエドリコヴスカ)が、同級生らしい美しい男の子ジュゼッペ(ガエターノ・フェルナンデス)の後をつけて山の中に入っていく美しいシークエンスが描かれる。この舞台がシチリア島らしい。事前に資料をきちんと読んでいけば、本作のストーリー展開の意味がわかるが、読んでいなければ、その後の展開はサッパリ……。若い2人の俳優の魅力は、極端なクローズアップの手法を含めてよくわかるが、何しろストーリーがサッパリ……。

◆本作鑑賞後にチラシを読んでハッキリわかったのは、本作は「1993年、シチリアで実際に起きた誘拐事件から紡いだ、少年少女の美しくも切ない幻想的なラブストーリー」だということ。映画を観ていけば、その文章後半の「少年少女の美しくも切ない幻想的なラブストーリー」はわかるが、前半の「1993年、シチリアで実際に起きた誘拐事件」がサッパリわからないから、つい私はイライラ。

『ゲティ家の身代金』(17年) (『シネマ42』172頁) はタイトルからもストーリー展開からも、ある「誘拐事件」を巡る面白い映画であることがよくわかったが、本作では、一

体誰が何のためにジュゼッペを誘拐したのかがサッパリわからない。だって、誘拐による身代金要求等の物語は何も登場しないうえ、ホントに誘拐事件が発生しているのか否か、つまり、単にジュゼッペが神隠しにあっていただけなのか否かすら、ルナの行動を軸とする幻想的なストーリー展開からはわからない。どうも、私はこの手のワケのわからない映画は苦手！

◆第91回アカデミー賞で、アカデミー作品賞、監督賞等最多4部門を受賞したギレルモ・デル・トロ監督の『シェイプ・オブ・ウォーター』(17年)は、“アマゾンの半魚人”が登場する幻想的な映画だった(『シネマ41』10頁)が、同作は水の使い方がすばらしく、そのため水を使った幻想的なシーンの美しさが際立っていた。

それと同じように、本作にも川のシーン、水のシーンが登場し、現実の世界か夢の世界かもわからない水の中で、若い男女が出会い抱き合うシークエンスが登場する。それはそれで美しく、本作のポイントになるシーンだが、私にはそのシーンの“必然性”が全くわからないのが難点だ。

ジュゼッペはマフィアに誘拐され、監禁されているのに、そのジュゼッペとルナがと「いっつも、そばにいるよ」がなぜ本作の“売り言葉”になるの・・・？

◆チラシに「ギレルモ・デル・トロの作品を彷彿とさせる素晴らしさ」と書かれているとおり、脚本を共同で書き共同で監督したアントニオ・ピアッツァとファビオ・グラッサドニアによる本作にはギレルモ・デル・トロ監督の『シェイプ・オブ・ウォーター』の影響が感じられる。しかし、『シェイプ・オブ・ウォーター』は、あくまでファンタジーな作り話の映画。

しかし、本作は「1993年、シチリアで実際に起きた誘拐事件」のはずだ。それならそれで、それに合わせた映画の作り方があったのでは・・・。つまり、私は「1993年、シチリアで実際に起きた誘拐事件」と「少年少女の美しくも切ない幻想的なラブストーリー」との融合は失敗だと思わざるをえないのだが・・・。

2019(平成31)年1月11日記